

ウィズコロナ、アフターコロナ時代の教育の役割について

～令和2年度教育論文集刊行に寄せて～

審査委員長 菊池 龍三郎

1. 令和2年度応募状況を振り返って

令和2年度は誰もが経験したことのない新型コロナウイルスの世界的大流行、パンデミックに襲われた年になりました。それは未だ収束の見通しも立たないままですが、その間ほとんどの社会活動は政府や自治体による感染防止のための活動自粛要請を受けて中止や延期を余儀なくされました。しかし、だからと言って学校教育は児童・生徒の教育・学習活動を休止するわけにはいきません。学校・先生方にとってのこの1年は、改めて学校教育とは何かを問い直し続けた年であったと思われまます。コロナ以前には「学校教育」とは、基本的には常に「学校で行う教育」、すなわち、「学校という同じ空間で同時に同じ仲間と一緒に同じ活動をする」という前提がありました。しかし、これからは必ずしもこの前提は当たり前のことではなくなるかも知れないと思ったこともあるのではないのでしょうか。

そして、教育現場にオンライン授業が一気に普及しました。日々の準備、授業の実施、その後の整理とまとめ等々、さぞ大変であったことと思います。コロナ禍は先進国の中では遅れていたとされるデジタル化の重い扉を一気に開けました。先生方誰もが長年慣れ親しんだアナログの世界から手探りでデジタルの世界に飛び込んだ気持だったと思います。

前置きが長くなりましたが、第44回教育論文事業についても主催者側、それに私達審査に加わる委員一同、そうした予想もしない状況下でご苦労されている先生方には、研究論文を書く余裕はないであろうと思っておりました。しかし、そういう中でも64編の応募論文がありました。近年は大体120編前後という高水準でしたが、その半分には達したということです。このコロナ禍にあってもこれだけ応募があったことに私達は喜び、そして応募された先生方に対して、本当にご苦労様でした、と心からの敬意を捧げたのでした。審査委員一同、コロナ禍で大変な状況にある先生方の様子を行間から読み取りながらいつも以上に心を込めて読ませて頂いたつもりです。

その結果は最優秀賞は該当無く、優秀賞4編、優良賞13編、奨励賞1編という結果でした。最優秀賞にはもう少し研究時間をかけて頂く必要があります、この1年の状況を考えればやむを得なかったと理解しております。次に、優秀賞の4編について、簡単に受賞者名とテーマだけ紹介しておきます（以下、応募順）。

- ① 倉田清美先生（守谷市立大井沢小学校）の「読み書きの力と語彙力の向上を目指した支援の在り方～発達性読み書き障害と特異的言語障害をもつ児童の支援を通して～」は、言語発達特別支援学級に在籍する第3学年児童に共通する言語発達の障害として、語彙の少なさがあることに着目し、効果的な支援には背景にあるものを的確に把握する必要があるとして色々と検査を実施し、障害の複雑な構造を明らかにし、その上で阻害している「読む・書く」の力を付けるために工夫した文字の指導支援の有効性を確かめようとした研究です。研究が進むにつれ障害の姿は益々個別的になり、指導支援も個別化することは避けられませんが、

同時にその周辺のより広い児童への応用可能な研究を意図したことが窺われる研究でした。

- ② 大津利之先生（神栖市立軽野東小学校）の「自閉症・情緒障害学級における体験活動が及ぼす教育的効果～小学校におけるビオトープを用いた自然体験活動を通して～」は、表題が端的に示すように、自閉症・情緒障害学級の児童の体験活動にビオトープを導入するとともに、その教育的効果を検証しようとした研究です。ビオトープは今日広く活用され馴染みのある施設・設備ですが、これを自閉症・情緒障害学級の体験活動に活用しようとしたユニークな発想による研究実践でした。子ども達が楽しそうに生き活きと活動する姿が目に見えようような研究で今後の展開が期待されます。
- ③ 石貝高男先生（つくば市立高崎中学校）の「社会的な見方・考え方を働かせ、『活用する力』を育成する社会科学習指導の在り方～ICTを活用した家庭学習と授業の連動を図り、習得と活用を関連付けた単元構成と3つの連続した単元での段階的な学習活動を通して～」は、コロナ禍の中では、ICTを活用して家庭学習と学校の授業との連携を図らねばなりません。その中で社会的な事実や事象の理解力を育てるポイントは常に「活用」を前提として効果的な内容習得を図ることであるとして、単元構成と展開のプロセスを工夫した研究です。コロナ禍という状況に対応した熱心な研究で参考になる研究です。
- ④ 井川珠美先生（茨城町立青葉小学校）を代表者とする『『学び合い活動』を通して『できる』『わかる』を実感し、自ら学ぶ児童の育成～算数科を中心とする学校全体の取り組みから～』は、「できない」「わからない」子どもが出やすい算数科の授業において、「できる」「わかる」喜びを味わわせ、さらに「学びたい」という意欲を引き出すために、「学び合い」に足がかりを見出そうとした意欲的な共同研究です。「学び合い」が画一化、定型化しないように留意しながら研究を進めた力作でした。この先、ぜひこの研究の経過と結果を研究に参加した先生方みんなで改めて丁寧に振り返り検証し直して頂きますと、さらに多くの成果が共有されるはずと期待される研究でした。

2. 新型コロナウイルスがもたらしたことについて

ウィズコロナ、アフターコロナの時代は教育にも多くの課題を投げかけていると思います。それを以下、思いつくままに挙げてみます。

コロナ禍がもたらした影響の凄さを誰もが身をもって感じているのは、一昨年（2020年）の末に世界のほんの一部で確認されたウイルス感染が瞬く間に世界をのみ込んでしまったこと、世界中の経済が同時に立ち行かなくなってしまうことに表れています。世界が相互依存的につながっていることを再認識しましたし、一方で世界中の科学者の協力体制の速さは驚くほどで、先日のNHKテレビではAI（人工知能）で僅か1年余りに世界中で発表されたコロナウイルス関係の研究論文30数万本を読み込み分析し、今後の有効なワクチンや特效薬等の開発の指針を提供してくれていると言うのです。この場合のグローバル化とデジタル化は、困難な事態にも世界中の知性の連帯を生み出す力になっています。

コロナ禍によって子ども達の身の上にも色々なことが起こっています。親が仕事を続けられなくなったとか、失業したとかで、厳しい生活を強いられている家庭の子どももいたと思います。日本社会が格差社会になったと言われて久しいのですが、その中で少なからざる子ども達が、自分の将来は多分自分にはどうにもならないものと、人生の早い段階で将来への努力を諦めてしまうとされています。コロナ禍はそうした「生きがい」や「やりがい」の格差、それは結局努力の格差につながり、格差をさらに広げてしまうとの心配でもあります。さらに、身近な人達が感染し、それをネット上で誹謗中傷されて傷ついたり肩身が狭い思いをしたりした子どももいたかと思えます。グローバル化とデジタル化は、差別を無くすよりも新しい差別を生

み、とてつもない勢いで広めてしまうことを私達は知りました。このように様々のことが同時に起こる中で、先生方は子ども達の盾となり、また頑張っている子ども達を励まし続けています。

しかし、コロナ禍で私達が心配することの1つは、子ども達の学力の差が広がってはいないかということです。コロナ禍の中で学校、家庭共に、不十分なデジタル環境であったにもかかわらず、オンライン授業が一気に広がりました。その中で子ども達の学びがややもすると未消化のままとか内容の突っ込みが浅く物足りないままに終わっているとの声もあります。だからと言ってオンライン授業はだめで対面型授業が優れていると考えるべきではないと思います。私などは、普段から対面型であっても授業のねらいを子ども達にきちんと伝えようと努力している先生方は、オンライン授業でも悪戦苦闘しながらも子ども達の満足感を高めようと授業を工夫しているように感じています。家庭や子ども達を取り巻く状況が厳しくなっても、学校教育がしっかり機能して、家庭や子ども達の頼もしい支えとなつて、格差の広がりの心配を吹き飛ばしてほしい。たとえこの先、オンライン授業が増加しても、それはイコール非体験型で満足度が低いものという定型的な評価を克服して、子ども達の学習理解を深めるような積極的な工夫や取り組みをここで発表して頂きたいと願っています。

3. 子ども達と共有する次の社会のイメージ

この数年しきりに耳にするようになった言葉としてSDGs（持続可能な開発目標）があります。国連が採択した2016～2030年に各国が取り組むべき様々の問題とその解決のための具体的な行動目標のことです。貧困や飢餓の問題をはじめとして、17の大きな目標と全部で169の具体的な行動目標、ターゲットを掲げました。以下に大きな17の目標だけ挙げておきます。

1. 貧困をなくそう 2. 飢餓をゼロに 3. すべての人に健康と福祉を 4. 質の高い教育をみんなに 5. ジェンダー平等を実現しよう 6. 安全な水とトイレを世界中に 7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに 8. 働きがいも経済成長も 9. 産業と技術革新の基盤をつくろう 10. 人や国の不平等をなくそう 11. 住み続けられるまちづくりを 12. つくる責任 つかう責任 13. 気候変動に具体的な対策を 14. 海の豊かさを守ろう 15. 陸の豊かさも守ろう 16. 平和と公正をすべての人に 17. パートナリシップで目標を達成しよう（※）

本当はこの下の169の具体的な行動目標と合わせた全体を子ども達に見せてやりたいところです。ポイントはこの17の目標のうち例えば1や2の貧困や飢餓、3や4の健康や教育、さらには6の安全な水の供給などはすべて開発途上国の問題に思えます。しかし必ずしもそうではありません。日本の子どもの6人から7人に1人が貧困に苦しんでおり、コロナ禍の中で収入減に苦しむ一人親家庭の親子を対象に子ども食堂の活動が増えており、一方で日本では毎日何百万トンもの食品ロスが発生し捨てられているという現実があります。

重要なことは貧困も飢餓も途上国だけの問題でも責任でもなく、先進国の問題でもあり責任でもあるとする視点がこのSDGsを通して広まってきていることです。持続可能な世界づくりに参加していくためには、世界が相互依存関係、言い換えれば運命共同体としてつながっていることを自分（達）で想像したり、学習を通して具体的に確かめたりできることから始めることです。持続可能性という問題意識を小中学校の時から自然に持つようになり、自分（達）で考え実践できるようになったら、この子ども達には間違いなく知性が輝き始めていると思います。グローバル化する世界を全体として把握する力を身につける材料は豊富に存在していると思っています。

※ 参照（一社）イマココラボ

URL <https://imacocollabo.or.jp/about-sdgs/>（最終閲覧日：2021/5/7）